



「その瞬間」再現は難しい

朝日新聞 12(H24). 6. 29

オウム真理教の高橋克也容疑者がついに逮捕されました。東京・大田区西蒲田のマンガ喫茶にいるところを警視庁の捜査員が確保しました。

では、いったいどのように見つかったのか。6月15日付夕刊の朝日新聞の記事を読むと、こう書いてあります。

「15日午前8時半ごろ、大田区西蒲田7丁目のマンガ喫茶に高橋容疑者と似た男がいるとの情報があつた。警察官が午前9時20分ごろ、店を出る高橋容疑者に職務質問したところ、本人と認めため、最寄りの蒲田署に任意同行した」

同日の読売夕刊はどうか。

「15日午前8時半頃、大田区西蒲田の漫画喫茶から「高橋容疑者に似た男がいる」との通報があつた。同庁の捜査員が9時10分頃に到着し、「高橋克也か」と聞く

と、「はい」と答えた」朝日の記事では、誰が通報したのかわかりませんが、読売を読むと、警察に通報したのはマンガ喫茶の従業員のようなので

夕刊は、どうしても速報優先。詳しい内容は翌日の朝刊を読むこととなります。16日付の朝日朝刊を読んでみましょう。

「午前9時前、私服の捜査員2人が来た。「1、2日前に高橋容疑者が店に来たとの情報がある。来客記録を調べたい」。店員は「今、似ている男がいる」と伝え

た」あれっ。マンガ喫茶の店員が警察に通報したわけではないようです。捜査員が来たので、伝えたと

いる男が（東京都大田区西蒲田の）漫画喫茶に入っていくのを見た」。警視庁によると、逮捕のきっかけになった15日午前4〜5時の大森署への通報は、一般の男性からだった

読売新聞は、前日の夕刊ではマンガ喫茶から通報があつたと書いていたのですが、そうではなかったのです。

読売は「午前4〜5時の大森署への通報」と書いています。だったら、朝日の夕刊の「午前8時半ごろ」というのは、どこからの通報なのでしょう。今度は産経の朝刊を読みましょう。

「2日前、蒲田の漫画喫茶に似た男が入っていくのを見た」15日午前4時すぎ、警視庁大森署に男性から通報があつた。同署は管轄する蒲田署に連絡、捜査員7人が東京都大田区西蒲田の漫画喫茶に急行した

産経の記事を読むと、朝日は「午前8時半」と書いているのは、大森署から蒲田署に連絡した時間だろうと推測できます。でも、もしそうなら、なぜ大森署は蒲田署にすぐ連絡しなかったのでしょうか。午前4時すぎに通報があつたのに、午前9時すぎに「急行した」（産経の表現）というのは納得できません。

それに、朝日は捜査員の数を2人と記しています。実は読売も日経も2人と書いています。さて、2人なのか、7人なのか。

疑問は他にも浮かびます。捜査員は高橋容疑者に何と声をかけたのか。

読売夕刊では、

「はい」と答えた」とあり



が、翌日の読売朝刊は、こう書いています。

「約15分離れた路上で「高橋克也の件で捜査しています。協力して下さい」と声をかけた。

男は「はい。私が高橋克也です」と答えた

なんだ、高橋容疑者自ら名前を名乗っているではありませんか。

新聞によって内容が異なるのはまだわかりませんが、同じ新聞でも夕刊と朝刊で内容が異なっています。まるで芥川龍之介の小説「藪の中」のようではありませんか。

事実関係を正確に取材して記事に再現することが、いかにむずかしいか、わかります。と同時に、新聞を読み比べ、「本当は何が起きていたのか」を推理することもまた楽しいのです。それがわかっていたらただでしょうか。

◆東京本社発行の最終版を基にしています。

高橋克也容疑者逮捕を伝える新聞各紙